

# 失語症者の談話と固有名詞の理解

## 第 1 章 序論

### 1.1 目的

失語症とは、聞く、話す、読む、書くなどのほとんどの意思伝達モダリティーが脳損傷の結果、障害されて生じる中枢性の言語障害である。その症状の内容や重症度は多岐にわたり、失語症のタイプも損傷部位の違いなどに応じて細かい分類がされている。

このような失語症に対する研究やリハビリテーションがわが国で本格的に開始されてから、すでに 30 年近くが経過した。この間、CT や MRI などの画像技術の発達と普及にともない、失語症などの高次脳機能障害を主たる研究分野とする失語症学や、神経心理学が大きく発展した。また、失語症者への評価やリハビリテーションを担う言語聴覚士の養成も行われてきた。

失語症に必発する症状のひとつに、聴覚的および視覚的に提示された言語素材への理解障害がある。従来の失語症者の理解力は、得られた結果に一般性をもたらすべく、ある単語が置かれている文脈情報や、失語症者のもつ経験などを極力排して検討されてきた。具体的には一般名詞や短文を、特定の状況から孤立させた検討がほとんどであった。また、それらの分析も文法的な観点からのものが多かった。

ところで、失語症へのリハビリテーションの基本は身体障害のそれと同様、残されている能力を活用して、障害された能力を補うことである。そのためには、残されている能力がはば広く調べられる必要がある。し

かし、いまだ検討の及んでいない領域も数多く残されている。

失語症者の大半は、もとのレベルまでの機能回復は望めず、障害をもったまま日常生活をおくらざるを得ない。そのため、失語症者が日常場面で遭遇、または必要とする言語素材の処理能力の分析や、その支援方法の開発などは、リハビリテーションを担う我々言語聴覚士に課せられた第一の使命である。しかし、日常生活につながる研究や支援方法の開発は、今までなおざりにされがちで、報告は極めて乏しかった。日常での状況をよりの確に捉え、支援しようという実用主義的アプローチも提唱されているが、具体的な研究成果は少ない。

失語症の重症度により抱える問題の質は異なるが、筆者は特に以下の2つの領域が、失語症者の理解障害の研究からもれてきたと考えてきた。まず、軽度失語症者の談話の理解である。日常では単語や短文の意味が、それ自体独立して機能することはまれで、ほとんどは特定の文脈のなかで意味が限定される。また、日常の多くの情報は談話の中で伝達される。しかし、実用主義的観点があまり重視されない傾向の中、談話の理解は世界的にもわずかしこ検討されてこなかった。さらに、数少ない談話研究の中でも、日常場面で使われている談話そのものを、理解の素材とした研究はまったく行われてこなかった。このため、短文の理解がほぼ可能となった軽度失語症者にとって、日常の談話がどの程度理解できるのかなどは推測も困難だった。

本論文の前半は実用的アプローチの観点から、日常よく聞くラジオニュースや長時間談話などの素材を、無修正またはそれに近い形で与え、その理解力を検討するものである。さらに談話を連続提示し、それらの理解と把持のモデルを構築しつつ、考察するものである。連続談話の理解や把持に関する研究やモデルなどは、健常者対象の研究でも前例がな

いと思われる。

失語症の最重度のタイプは全失語と呼ばれる。口頭や書字による意志伝達能力の喪失のほか、「お年は?」、「痛いですか?」などの簡単な質問の理解もできなくなることが多い。従来、全失語の理解力の評価や訓練には、高頻度で具体的な一般名詞が使われてきた。これはそれらの語が、もっとも理解しやすい語彙カテゴリーであるという“常識”があったからである。ところが、別種の語彙カテゴリーに属する語がよりよく理解されるという報告が現れてきた。もっとも注目すべきは地名などの固有名詞の理解である。

われわれ自身は姓名、住所、本籍など公的に認知された固有名詞を与えられることによって、社会的に存在する。家族や知人、会社、所有物なども、ある固有名詞を互いに共有することで、その対象に関する情報交換が可能となる。従って、これらの固有名詞が理解できるか否かは、一般名詞や短文の理解に障害を示す全失語や重度失語症者の日常生活にとって、きわめて重要である。しかしながら、失語症学や神経心理学では、軽度失語症者の固有名詞の想起障害が時に報告されるのみで、全失語や重度失語症者の固有名詞の理解に関する研究はほとんどなかった。また固有名詞の下位カテゴリー、例えば地名と人名の理解度の比較、聴理解や読解などの理解モダリティーの比較などは行なわれていなかった。重度の失語症を扱った最近の検査や教科書でも、固有名詞に関する記載はほとんど無い。

本論文後半では、全失語群における、一般名詞、地名、人名の理解実験を行い、それらの理解を比較する。さらに、固有名詞の言語学的特殊性、人名の想起障害、人名に関係する脳部位などを包括的に説明すべく、人名の神経心理学的脳内処理モデルを提案することを目的とする。

Sanfordら1988は、固有名詞は談話の焦点を決める重要なコントローラーであると述べている。通常、談話の始めには、あるテーマを固有名詞で指定してから、談話が展開することが多い。例えば、「中国上海への日本企業進出」などである。全失語症者の場合、談話中の固有名詞が理解できれば、その談話を概要的に理解できる可能性もある。本論文で提示する談話と固有名詞の理解モデルは、将来それらの臨床的支援の基礎的論拠になるものと考えている。

また、高齢化に伴い、健常者でも談話内容の記銘力や、固有名詞の想起力は低下する。従って、談話と固有名詞の研究は失語症者のみならず、健常者の認知活動の一端を明らかにする上でも重要であろう。

本章第2節では失語症者の一般的な理解力障害について述べる、第3節では実用主義的アプローチを紹介し、筆者の立場をこのアプローチと比較する。第2章の軽度失語症者の談話の聴覚的理解では、無修正のラジオニュースを使い、その理解力を実験する。次に連続してラジオニュースを聞いた場合の理解力を実験し、軽度失語症者群、失語症者と年代の一致する健常者群、健常者若年群の成績差を検討する。そして、これらの結果から、連続談話聴取における理解と把持の関係についてのモデルを提案する。さらに、30分という長時間の談話の実験を行い、このモデルを検証する。

第3章では全失語や重度失語症者の固有名詞の理解力を扱う。筆者のおこなった実験、固有名詞の言語学的位置、認知/神経心理学的な検討、健常者の人名の想起困難などから、これらを包括的に説明すべく人名の脳内処理に関する神経心理学的モデルを提案する。さらに、自伝記憶は保たれたが、意味記憶が傷害された症例を紹介し、人名と地名、意味記憶、自伝記憶の関係について総合的に考察する。

第4章では、本研究の総括を行うとともに、談話と固有名詞の研究の臨床的な意義について述べる。